

優秀賞

感謝の気持ちと利他の心をあたりまえに

山口県 岐陽中学校 一年
仲子 遥音

「おはようございます。」

今日も朝から、大きな声が聞こえてきた。

私は、この声の主、祖父が苦手だった。祖父は耳があまりよくないので、とにかく大きな声で話をする。祖父のことが苦手になったのは、初めからではない。小さい頃からよく遊んでくれて大好きだったはずだが、小学校高学年になるにつれて、祖父の大きな声を周りの知り合いに聞かれるのが、恥ずかしくなってからだ。

祖父はお人好しで、さまざまなボランティアをしている。私が小学生になる前から、登下校の見守りボランティアで通学路に毎日立っており、地区のお祭りには実行役員であちこち動き回り、小学校の運動会では来ひん席に座っていた。

祖父のことを最近苦手だと思わなくなってきたのは、私が祖父の話を周りの人からよく聞くようになったのもあるかもしれない。

今まで私は、地域を明るくきれいにしてくれている方々に目を向けることが少なかった。きっと、あまりにも自然に私たちのそばで見守ってくれているからかもしれない。

しかし中学生になり、初めて「利他」という言葉を知った。自分の利益よりも他の人のために行動するといった意味合いで、常にそういう人であろうという学校の教えがあった。私はもちろん、「自分さえよければいい」なんて考えはしていないつもりだ。でも、自身の行動がいつも誰かのためになっているかと聞かれると、あまり思い当たることがない。

では、どういった行動が「利他」と言えるのだろうか。自分の周りにいる人たちに目を向けてみた。通学路に色とりどりの花を植え、毎日草抜きをしてくれる女性。毎週末、ごみステーションをきれいにしてくれる男性。街路樹の下を毎日掃除してくれる女性。そして、お世話好きの祖父。

祖父は、知り合いではない人にもよく話しかける。そんな中で、人助けも多くしてきている。最近では、近所で迷子になっていた高齢女性を見つけ、話を聞き自宅まで送り届けていた。どうやら娘さんの家に一緒に住むようになって日が浅いので、家が分からなくなってしまっていたようだ。

高齢女性の言うことが二転三転する中、話を聞いたり一緒に休んだりしてくれたおかげで、たどり着くことができたらしい。娘さんが父に感謝を述べても、祖父は「当たり前のことをしただけ」と答えたそうで、祖父のなにげない日常の一部のようだ。

「利他の心」とは、人のために当たり前に行動できることだと思った。「ありがとう」と言ってほしいわけではない。相手にとってよい結果になってほしいだけなのだ。しかし、やはり「ありがとう」と言ってもらえると、自分がしたことが相手にとってよかったのだと分かるので安心するようだ。私は、してもらうことを当たり前と思わず感謝を伝え、「利他の心」を持ち、当たり前に行動できるようにになりたい。

今日も大きな声が聞こえてくる。この声の主は、私の自慢の祖父だ。